

映画『ヒロシマナガサキ』

— THE DESTRUCTION IS "NOT" ENDED —

楠田 剛士

被爆三十年後に芥川賞を受賞した林京子の「祭りの場」(「群像」昭50・6)は、次のようにしめくくられている。

アメリカ側が取材編集した原爆記録映画のしめくくりに、美事なセリフがある。

——かくて破壊は終わりました——

原爆後の後遺症のみならず、息子の原爆症まで心配する林京子にとって、一体何が終わったというのか。この「しめくくり」の言葉から受けた衝撃が「祭りの場」の執筆動機だったと、作者は別のところで繰り返し述べている。「原爆記録映画」の具体的な題名は記されていないが、『広島・長崎における原子爆弾の効果』(原題「The Effects of the Atomic Bomb on Hiroshima and Nagasaki」、この映画についてはミック・プロデリック編著『ヒバクシャ・シネマー 日本映画における広島・長崎と核のイメージ』柴崎昭則・和波雅子訳、現代書館、平11・8の第六章に詳しい)のことを指しているだろう。私が観ることのできた『広島・長崎における原子爆弾の効果』(長崎編 日本語版)(長崎原爆資料館編・所蔵)では、終わりの方に「THE DESTRUCTION IS ENDED」という英文の映像が流れていたが、おそくこれが林京子が観た映像に当るものと思われる。

被爆六十二年後の映画『ヒロシマナガサキ』は、ロサンゼルス生まれの日系三世、ステイヴン・オカザキが制作・監督・編集を務めたドキュメンタリーである。林京子が、自身の被爆体験と様々な記録を用いて「祭りの場」を描いたように、ステイヴン・オカザキもまた、証言と記録を織り交ぜて映画を作った。十四人の被爆者と原爆投下に関与した四人のアメリカ人の証言と、日米の資料映像、写真、被爆者が描いた「原爆の絵」等々を通して、「原爆が何をもたらしたのか」という問題が深められていく。オカザキが原爆投下に強い関心を持つきっかけになったという「はだしのゲン」も、作者・中沢啓治の証言と、漫画とアニメの引用の形で登場する。アメリカで制作されたニュース映画やテレビ番組は、そのひとつひとつが興味深い話題を提供してくれる。被爆者が若い頃の写真を持って佇む姿は、現在と過去を絶えず往還する本作の性格をよく表しているのではないだろうか。

本作がアメリカのケーブルテレビで今年(二〇〇七年)八月六日から約一ヶ月間にわたって放送され、日本でも広島、長崎をはじめ各都市で公開されたことは、姿が消えていく体験者(被爆者、科学者)と、蓄積されてきた原爆記録に〈今・後〉どう向き合っていくのかという問題を日米双方に投げかけ、また映画自身がその問いに答えようとしている点において重要であると思う。上映時間一時間二十六分Ⅱ「八十六分」が、広島原爆投下の「八月六日」に合わせられたものかどうかは分からないが、本作にとって意味ある数字であることは間違いない。

さて『ロシマナガサキ』の原題は、"WHITE LIGHT / BLACK RAIN: The Destruction of Hiroshima and Nagasaki"である。副題を

見て、私は先に引用した林京子の言葉を思い浮かべたが、その連想もあながち的外れではなからう。というのも、『ヒロシマナガサキ』では『広島・長崎における原子爆弾の効果』からの引用もなされているからである(例の「しめくり」の言葉はないが)。原爆ドキュメンタリー映画として先行する『広島・長崎における原子爆弾の効果』の向けるまなざしが、大半は建物や植物だったのに対して、『ヒロシマナガサキ』のそれは徹底して人間である。前者からの引用の多くが、手当てを受ける人々の映像であることは、その証左であろう。

被害に関しては、とりわけ「後遺症」のセクシオンにおける被爆者たちの負傷の様子——頭、顔、目、首、腕、手、胸、背中、太股——の映像が、スクリーンを越えて観るものの皮膚感覚に強烈に訴えかけてくる(ちなみに現在、長崎原爆資料館に展示されている「熱線による人的被害」のパネル写真は、谷口稜嘩、山口仙二、吉田勝二の三氏を写したものであるが、全員本作に登場する)。人体への影響をめぐる話題は映画の後半にまでわたり、現在そしてこれから結婚、妊娠、出産、育児等に関わって、身体的・社会的に被爆者を拘束し続ける問題であることが語られる。ステイヴン・オカザギの前作『マッシュルームクラブ』(“The Mushroom Club”, 2005 アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門候補)の題名が、東琢磨が指摘するように「きのこ会」という組織名のほかに、世界中が「マッシュルームクラブ」の一員となっている現在の核状況をも意味していたことを鑑みれば(『ヒロシマ独立論』青土社、平19・8)、本作は副題が端的に表すように、投下から六十年以上経っても終わらない原爆の破壊をとらえようとしている。

次に本作の特徴だが、まず挙げられるのは、ナレーションが無く、テロップは最小限に抑えられていることである。そのため、観るものは映画から積極的なかわりを求められる。

たとえば、広島で被爆し、後に「原爆乙女」として渡米し、本人も数え切れないほど手術を受けた笹森恵子が、少女時代を振り返り軍歌を歌う場面がある。本編において笹森は英語で証言を行なっていくが、「出征」のセクシオンのみ他と異なっている。英語で「兵士が出征するときはみんな小旗を振って歌を歌いました」と説明した後、日本語で「行って来ると勇ましく、誓って国を出たからは……」と歌う。この歌は「勝ってくるぞと勇ましく誓って故郷を出たからは」と始まる「露営の歌」(作詞・藪内喜一郎 作曲・古関裕而、昭12)なのだろうが、ここでは歌詞が違っていることが問題なのではない。重要なのはその後だ。笹森は途中で詰まり首をかしげ、日本語で「忘れたな」と言い、「誓って以降の歌詞を何とか思い出そうとするのだが、英語で「忘れましたね」と言う。英語と日本語が交わる、印象的な場面である。笹森がどのようにして軍歌を覚えたのか、どのようにして英語を学んだのか、そういったことは、笹森の著書『恵子 ゴー・オン』(汐文社、昭57・6)を読めばいくらかは解決されるかもしれないが、映画では一切語られない。だが、それゆえ被爆だけにとどまらない笹森の半生があれこれと想像されるのである。カメラは、証言者の音声とともに、身振り、手振り、眼の動き、「間」をとりながら、直接言及されることはなくとも、身につけているもの、立っている場所、顔の皺までもが、証言者の半生を想像する手がかりとなる。他の被爆者や、アメリカ側の証言者の場合において

も同じことが言える。ナレーションによる解説のないこの映画の、どこを、どのように観るのか、どのように受け取るのかという問題は、観るもの一人ひとりに差し出されているのである。

また、本作では多くの証言、資料を集積するだけではなく、それらに有機的な関係を与える編集がなされている。冒頭での中国大陸を進攻する日本軍の「日の丸」と、連合軍の反撃により硫黄島に揚げられた「星条旗」との対比などが好例であるが、やはり密度が高いのは原爆投下の場面である。アメリカ側から見た、すなわちキノコ雲の上から見た広島原爆投下の経過が示された後、キノコ雲の下で起こった出来事が語られる。具体的には、フアットマンがB 29に搭載され、そのB 29が長崎に向かった後、原爆投下直前・直後の状況が次々に証言され、キノコ雲が立ちのぼる一連の流れを指す。広島・長崎の十四人の証言者が立て続けに登場するのは、全編を通してここだけであり、十四人の証言を長短の緩急をつけながら映し出していくことによって、一連の流れに緊張感を湛えている。

だが、観ていて気になる部分もあった。たとえば、証言者が広島と長崎のどちらの体験を語っているのか途中で判らなくなることもあるのだ。先ほどの一連のシーンの最後に映し出されたキノコ雲は、長崎原爆のものであった。広島で被爆した証言者の一人、肥田舜太郎は自らが見たキノコ雲を説明するが（肥田はキノコ雲の姿をありありと伝えてくれる）、それが長崎原爆のキノコ雲の映

像の前後に流れるために、まるで長崎のものを説明しているように映ってしまうのである。そこに違和感を覚えてしまった。もう一例挙げれば、映画の後半、「現在の広島」のなかで「何年もかけた要求が実り、被爆者らは現在日本政府から医療費補助を受けている」というテロップが流れるが、現在の在外被爆者の問題や原爆症認定訴訟を考えれば、テロップの文言をそのまま受け容れるわけにはいかない。

しかし、そのことによって、本作の価値が直ちに減ずるわけではない。映画の中には、長崎の証言者の一人、深堀悟が「もう、私たち72でしょ、私に言わせるとね、被爆者が死ぬのを待つてるんじゃないかっちゅう。もう少し日本の政府も被爆者のことを考えてね、対策を立ててほしい」と語る姿もあり、先のテロップを相対化する声として響いているからである。そうした映画内部での相関性も含めて、『ヒロシマナガサキ』の持つ可能性と問題点とが十分明らかになったとは思えない。蓄積された膨大な原爆記録に分け入り、問題として結んでいくような想像力を鍛えるために、私はひとまず『ヒロシマナガサキ』を手がかりにしたいと考える。

二〇〇七年、アメリカ、一時間二十六分、カラー

配給 シグロ、ザジフィルムズ

公式サイト <http://www.zazifilms.com/hiroshimanageraki/>